天眼

啓発って教えないことだったんだ

永田 和宏

どうも今の大学は、学生に親切すぎ、かつ多くを教え過ぎているのではないかと思っている。

私にはちょっと衝撃的な思い出がある。拙著『知の体力』（新潮新書）にも書いたことだが、私が京都大学に入学したのは1966（昭和41）年。時の総長、奥田東先生の入学式における総長告辞には度肝を抜かれた。総長曰く、「京都大学は、諸君に何も教えません。」

えーッという訳である。せっかく頑張って京大に入ったのに、この大学は何も教えてくれないのか！

衝撃ではあったが、その時、私はちょっと鳥肌が立つような感激をも覚えたのだった。自分は今、まったく別の世界に入ろうとしているという、ぞくぞくするような感激。

「教える」とはどういうことか。大学は決して知識の吸収のためだけにいく場ではないというのが私の持論だが、それを論じるにはこのスペースでは足りない。

ここでは、社会で一般に用いられている「啓発」という言葉は、実は皆が意味を取り違えているのではないかということについて、少し述べておきたい。

「啓蒙」と「啓発」は、同じような意味で使われているようである。

「広辞苑」では、「啓発」は「知識をひらきおこし理解を深めること」と説明され、「啓蒙」は「無知蒙昧な状態を啓発して教え導くこと」と、こちらは「啓発」という言葉まで用いた説明になっている。どちらも教え諭し、かつ理解を深めて導くというニュアンスであろう。

「啓蒙」の意味が蒙を啓くというのはいいとして、「啓発」は実はまったく意味が逆転していると私は思っている。「啓発」の語の由来は、孔子の「論語」にある。

子曰く、憤せずんば啓せず。悱せずんば発せず。　述而第七

「憤す」というのは、知りたくて身悶えしている様子。「悱す」というのは、口まで出かかっているのだけれど、うまく表現できないでいる様子。つまり孔子は、相手が知りたくて身悶えしているようでなければ教えてやらない。わかっていて口まで出かかっているのだけれど、うまく言葉にできない、そういう状態でなければ、言葉を発してはやらない、と言っているのである。

「啓発」という言葉は、ここに由来するのであるが、現在使われている意味は、孔子の言っていることと正反対ではないのか。

つまり孔子は、弟子が本当に知りたくてうずうずしているようでなければ、教えてなんかやるものか（まあ、孔子はこんな下品な口のきき方はしないだろうが）、と言っている。この否定的ニュアンスが正しいことは、次に続く言葉によっても知ることができる。

一隅を挙ぐるに三隅を以て反らざれば、即ち復たせざる也

一つの隅について説明してやったら、ああ、あとの三つの隅はこういうことですねと返ってくるようでなければ、二度と教えてなんかやるものか、とまで言っているのだ。

つまり、ほんとうに身悶えするほどに知りたいと思っていなければ、そして一つのことを教えれば、あとの三つの隅については自分で考えようとするのでなければ、そんな奴には二度と教えてやらないよ、と孔子は言う。大学の教師として、一度くらいはこんな言葉を口走ってみたい気がするが、これが「啓発」の本来の意味なのである。

「天眼」に長く書いておられた井波律子さんがご存命であれば、ぜひお聞きしてみたいところだが、いつ言葉の意味が現在のように逆転して使われるようになったのだろう。

ここから学ぶべきは、望んでもいない人間に「啓発」と称して、教え導こうとしてもほとんど効果は期待できないということではないか。逆に百害あって一利なし、とまで私などは思うのである。

特に大学という場が、他律的に、かつ自動的に、一律に知識を教授するという場になってしまっては、大学の本来の意味はなくなってしまうのではないかと、私は本気で思っているのである。

（JT生命誌研究館館長、歌人）

京都新聞社
The Kyoto Shimbun Co.,Ltd.
©京都新聞社　無断複製・転載を禁じます